

神戸・2022.10.3(日)

明石城跡の石垣を背景に組み立て式能舞台上演される能「小鍛冶」=いずれも県立明石公園

明石城跡を背景に能が上演される秋の風物詩「明石新能」が1日夜、3年ぶりに県立明石公園で開催され、約千人が来場した。天皇の命を受けた刀工が神と剣を打ち上げる「小鍛冶 白頭」が演じられ、来場者は暗闇の中、かがり火に照らされた能舞台上で繰り広げられる幻想的な物語に浸った。  
(松本寿美子)

# 幽玄に3年ぶり新能



1989年の明石市制70周年を記念し、市内の商工業者や能愛好家らが明石新能の会を結成して始めた。2019年を最後に、新型コロナウイルスの影響で中止が続いていた。

鐘と 鐺が田んぼの水を取り合う狂言「水掛簀」でにぎやかに開演。続いて住吉神社(魚住町中尾)の西海英延宮司らによる火入れ式が行われた。ご神火が奉仕者5人のたいまつに継がれ、舞台周辺のかがり火にともされると、同会の谷吉将会長はあいさつで「お能はいろいろなものを省き、少しの動きで感情などを表現している。ぜひそれらを感じ取ってもらいたい」と

## 明石公園

呼びかけた。

「小鍛冶」のクライマックス、刀工の宗近が相づちを務める稲荷明神と剣を造るシーンでは、観客は華やかな衣装や演者の緩急ある動き、謡に引きつけられた様子で見入った。

同市大久保町大久保の水田宏一さん(84)は孫のエメ君(8)らと鑑賞。「孫に伝統芸能を見せるため、屋外なら連れて来やすかったの」と話し、エメ君は「話を説明してもらったのでまあ面白かった」と楽しそうだった。

## かがり火の中、千人満喫

### 「小鍛冶」を上演



能上演に先立って行われた火入れ式